

「新刊紹介」

# 青森市史七

## 資料編一

大川 哲 夫

青森市では、寛永元年開港以来正史を経るに従って益々重要性を増して来た市の歴史の編纂を、斎藤啓八、鹿内一胤両氏に依頼され、既に昭和二十九年十月『青森市史一 教育篇』を発刊して以来、「港灣編上下」、「陸海編上下」、「政治編」と長年月地道な努力を重ねて、

四月一年二月「資料編一」の編纂発刊を及ぶが、単に青森市史、津軽藩史に止まらぬ貴重な史料であるので、ここに紹介する次第である。

本書は、伊東善太郎家文書の一部を収録したものであるが、伊東家については既に県立図書館蔵整理課長小笠原

二郎氏によって紹介されているが、本書の紹介に当たつて改めて略述したい。

伊東家は屋号を竜壁といい、初代庄兵衛（九代善五郎（句名武五郎、当主）と正徳年間以来、決断の名主、廻船向屋を営み、代々善五郎を襲名している。同家に伝存する史料は日記類、備用年鑑、廻船諸役類、証文類、書簡類、辞令類、定款規約類など約一万点にのぼるといわれる。本書に収録されているのは、家内年表または家内年鑑とよばれる日記であつて、嘉永六年九月より明治四年七月までの記録である。この膨大な記録の著者は竜壁七代善五郎の養子彦太郎である。七代善五郎（前名益貞助）には長男晴三郎がいたが、故あつて分家益理兵衛を相続した。彦太郎は天保七年十一月三十日七代善五郎（養子）の妻又ねの弟として生まれ、幼名を慶吉といひ、長じて嘉永五年七月七日竜壁に養子入籍、彦太郎と改名、実父六代善五郎及び養父を助け家業に従事、公儀、仙台、弘前、黒石など各藩の御用達を勤めたが、往末病弱であり、明治五年八月二日、相続く改変の最中八代目を継ぐことなく三十七才の短い生涯を閉じた。

さて、この日記は全六巻七番からなり、その名跡も家内年表、家内年鑑、家内通観など巻によつて異つてゐるが、記述内容には相違はない。日記とはいへ、竜壁が御用達町人であり、廻船向屋であることから各藩との商取引の記録は当然であるが、大阪・江戸商人との接触が

一 番 家内年表 自嘉永六年九月

至安政三年十二月

二 番 家内年鑑 自安政四年正月

至安政五年十二月

三 番 家内年鑑 自安政六年正月

至慶応二年十二月

上京直中日記 自文久三年九月

至明治元年十二月

四 番 家内年表 自慶応三年正月

至明治元年十二月

五 番 家内通観 明治二年

六 番 家内年表 明治三年

七 番 家内年表 明治四年

り中央の経済的、政治的右動向を適確に把握しており、記述年代からして幕末における藩政の困窮、箱館外海貿易港として南港されてからの経済上の動向、維新当初の奥羽列藩の微妙な動き、箱館戦争による青森市内の混乱状況、維新後の相続く政治機構の改変など、幕藩体制に寄生している御用達町人であるにせよ、町人から見た目くるめくはかりの激変を生き生きと描き出している点、貴重史料といわねばならない。これらの内容を二、三の史料をあけて紹介したい。

安政五年の政変について

徳川実記 安政五年七月五日の条

尾張殿。水戸前中納言殿。松平越前守等御答。

伊東家文書 安政五年八月三日の条

致請米旨吉より来状左ニ

一 定而御聞又可被着在去月五日、尾州様、水戸様、越前様御阿、御老中方も太田様、股城様、又世様御病  
質、趣ニ而、御出勤無之、御三家御阿ニ而、小大名  
其外御親類方ニ而不少御差合出来、江戸中右ノ内変  
ニ而アメリカよりモ此痛ノ趣申参候

とあり、受信に一月月の遅れはあるが常に中央の動向を世人の動きをも加えて記録している。また、日本産商茶約後の商港については

徳川実記 安政六年正月十三日

一 神奈川、長崎、箱館三港。近々御用相成候ニ付而者、古場所ノ江出稼又ハ移任致。勝手ニ商売可為致系。望之者ハ其港々の所役人へ。引合候様可致候。

伊東家文書 安政六年二月十六日の条

箱館御役所より此方並薩林連名ノ名当ニ而御甲狀到来、当未六月より和蘭、アメリカ、ヨロシヤ、フランス、

イギリス國々ノ五ヶ國ノ交易差許ニ相成候間、其方共も望み候ハバ御役所へ申立交易致不苦被仰渡候（下略）

と商港に際して実際に商人に対する交易の蝕の出された時期が知れよう。しかし商港後の国内に与えた経済上の影響に対してもは

慶応二年八月十二日の条

（前略）該ニ凶賊と申ても無之と而、右様ノ直殺必意近年異國交易以來金錢ノ位相失ひ、且金錢多分ニ相成候趣より諸品共格別の高直ニ相成候（中略）右ノ次才ニ相成一同難波ノ至ニ御座候追々如何可相成哉。

奥羽羽藩の動向については、仙台藩使者鈴木直記、永沼歳之允の渡海に際して

慶応四年六月二十七日の条

（前略）御内話ニ当國様と御同盟ニ相成候ニ付、追々京方ノ軍艦當面征討杯と申唱相向ひ候様ニ相成候ハバ、仙台く数七八百人軍艦ニ而青森江津海、直様青森區前加勢警衛可任旨弘前様と御申合ノ趣心得居候様御内話ニ御座候

とあって、同盟諸藩の動きが知られ、同知のことではあ

るが仙台藩使者宮本養依が弘前逗留中に、京都詰用人西  
遊平馬が蒸気船で三馬屋に到着、弘前にて同船既退を説  
き、津輕藩を勤王方にした事情が託され、箱館戦争に際  
しては、青森に参集した官軍は郷夫を加えて九千余人、  
これらの宿泊については、「市中夫婦暮の春迄も御宿ニ  
預成混雜申斗無御座候」とあり、更に明治二年に至つて  
高直なる軍事諸入用ノ割当を尋け

(前略)各藩御人数より当處へ入金も不尠可有之候へ  
共、遊女屋料理屋等ノ斗入金ニ相成大家中家業体相止  
り物入斗リノ処捨遣作ニ相成、殊々業体通商更々無御  
座、殆ど困苦ノ処右ノ次才ニ而迄々共大金割付ニ相成  
候而は青森成立は扱置抱潰れニ可相成旨一同申唱市中  
甚々不取ニ御座候(下略)

と奥羽戦争、箱館戦争以末痛めつけられた町人の姿を切  
実に描いている。

以上、実際に史料を掲げて内容の多岐に亘ることを記  
してきたが、さらに、この日記で注目すべきものは、サ  
ミ番中に収録されている「上京道中日記」である。こゝ  
は文久三年八月藩命により麿ヶ沢船向屋塩屋治右衛門、  
竹屋伝次郎、菊屋善右衛門、山本庄五郎と莞屋が「是に  
先納金相納居候康へ増先頼談任候様」と藩政政區迄の「

めの全業に出立した際の日記である。これによると、秋  
田―新潟―富山―敦賀―坂本―京都―大阪  
―堺―桑名―江戸―仙台を徑て帰青し、その途  
路各地の廻船向屋、船頭、商人と談合しているので、津  
輕藩との交易状況を知る貴重な史料であり、先にあけた  
史料からして藩当局が如何にこれら豪商を利用して幕末  
の藩政政打倒を計らんとしたかが窺われよう。

以上、簡単ではあるが、幕末期の動向を知る貴重な史  
料として紹介した次才である。

(金一。五三頁 青森市史稿纂室編)